

教科体育における「わかる」に関する研究

中嶋 悠貴（愛知教育大学大学院）

1 目的

本研究は、体育における「わかる」をどのように捉えたらよいか、身体運動を伴う学習という立場から検討することを目的とする。

2 研究1 我が国の体育における「わかる」に関する論考の系譜

(1) 研究の方法

体育における「わかる」（認識に関する関連概念を含む）を主題とする論考を収集し、その系譜を確認する。次いで、各論考の中心的な論旨における「わかる」の意味を検討し、類型化して示す。そして、各類型における「わかる」の意味について検討し、体育における「わかる」はどのように捉えるべきかを明らかにする。

(2) 結果と考察

収集した各論考（110 編）の論旨の「わかる」意味を検討した結果、「からだ作り」論、「運動文化」論、「形式知」論、「身体知」論の4つに類型化した。

類型化した4つの立場のうち、「からだ作り」論と「運動文化」論の立場の論考は、「わかる」対象が示されていたに留まる。しかし、「からだ作り」論と「運動文化」論はともに、「わかる」と「できる」は別として考えており、「わかった」結果は言語等の記号化したことで表出されると考えられる。これらを踏まえて各類型の特徴を示すと、表1のようになり、4つの類型は「形式知」論と「身体知」論の2つの立場に大別することができる。と考える。

このように様々な立場があるが、身体運動を伴う学習といった体育の固有性や、「心と体を一体として捉え」（文部科学省、2008・2017）るといった目標を踏まえると、体育における「わかる」は、記号化されただけの「わかる」では十分とは言えず、子どもの動きから「わかる」を捉える「身体知」としての理解が不可欠と考えられる。

3 研究2 体育授業の中から「わかる」を見出す

(1) 研究の方法

金子（2005）によれば、「身体知」には、「自我中心化身体知」と「情況投射化身体知」がある。そこで、「自我中心化的身体知」を見出すために個人で取り組む運動領域（小学2年「器械・器具を使つての運動遊び」）と、「情況投射化的身体知」を見出すために集団で取り組む運動領域（小学4年「ネット型ゲーム」）のそれぞれの授業を計画し、実践する。

次いで、身体知としてわかった動きならば、再現することが可能と考え、同じ条件で同じ動きを再現したと認められる動きを抽出し、その動きを基に、子どもは何が「わかった」のかについて考察する。

(2) 結果と考察

各授業において子どもが再現した動きから、前方に転がるために必要な力加減に関する身体知等の器械運動系の動きに関する身体知や、味方の捕球位置からその後の攻撃を先読みして動く身体知等のネット型における攻防の組み立てや戦術に関する身体知が形成されたと推察された。

4 まとめ

体育における「わかる」とは、身体でわかる「身体知」としての理解が不可欠であり、「身体知」として「わかったか否か」は、動きの「再現性」から捉えることができる。これは、言語等の記号化されたこと、いわゆる「形式知」だけで「わかる」を捉えようとする立場とは区別される。さらに、「身体知」を形成していくためには、自らの運動経験から身体でわかっていく学習が必要不可欠となるであろう。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省（2008）小学校学習指導要領，p. 92
- 2) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領，p. 123
- 3) 金子明友（2005）身体知の形成（上），明和出版

表1 各類型の特徴

論	「わかる」対象	「できる」こととの関係	「わかった」結果の表出 「わかった」こととの伝達可能性
「形式知」論	「からだ作り」論 ・生産労働のためのからだ（からだ作りをする理由やどのようなからだを作るか等） ・からだの現実や法則 ・運動の技術やルール	「わかる」⇔「できる」	言語や図等の記号化したこと
	「運動文化」論 ・運動の文化としての歴史や価値、本質 ・運動が文化として継承・発展する中で培われた運動技術 ・課題・実態・方法 ・運動の行い方（運動技術・身体の動かし方）		
「身体知」論	・運動の行い方（運動技術・身体の動かし方）	「わかる」=「できる」	動き (現象学的方法で捉える)